

看護学生による紙おむつでの排泄体験の内容と学び

白岩千恵子*¹ 小薮智子*¹ 竹田恵子*¹

1. 緒言

排泄は日常生活を営む上で不可欠な行為であり、食事や整容などと同様に基本的な行動のうちのひとつである。しかし長年の習慣のなかで排泄は恥ずべきものとされ¹⁾、排泄に関する問題は長らく表舞台にでてくることがなかった。

看護学生が実習等で出会う入院中の高齢者からは、「下の世話だけは受けたくない」や、「看護師に迷惑がかかるから寝る前の水分は控えている」などの声を聞くことがある。排泄行為は羞恥心を伴うプライベートな行為であるため、自分の排泄物を他者の目にさらす体験は、高齢者の自尊心の低下をまねく危険性がある。さらに排泄に関する悩みや心配ごとがある場合、ひとつ行動するたびに「漏れるのではないか」、「他人に知られるのではないか」などの不安により生活が制限され、思うように生活できない高齢者もいる。すなわち、排泄は日常生活と密接に関連しており、排泄ケアは高齢者の生活そのものへの援助ともいえる²⁾。しかし中には高齢者が紙おむつを使用することを「当たり前」ととらえている学生もいる。不十分なアセスメントによる排泄ケアの提供は、高齢者の排泄機能をかえって低下させることにつながる。したがって看護者には、高齢者の羞恥心や自尊心に十分配慮したうえで適切なアセスメントを行い、その人にあった排泄ケアを提供することが求められている。

先行研究では、実際におむつへ排泄する体験を取り入れた教授方法の有効性が明らかになっており、排泄体験学習は適切なアセスメントを行うために必要な高齢者の身体的、心理的状況などを理解することができる学習方法であると報告されている。具体的には、紙おむつを着用することの不快感や使用している対象者の気持ちの理解、家族の介護負担などを、体験を通して理解することができ、幅広く「排

泄ケア」をとらえるきっかけとなっていることが指摘されている^{3,4)}。A大学においても、学生は老年看護学の講義のなかで、排泄ケアは高齢者の尊厳やQOLにかかわる重要な援助であることや、排泄障害が高齢者に与える身体、心理、社会的な影響は大きいこと、アセスメントが重要であること、高齢者のもつ機能に応じたケアの方法などについて学んでいる。そして講義終了後に、テープ式の紙おむつと尿取りパッドを持ち帰り、紙おむつへの排泄体験と排泄ケア用品に関するレポート課題に取り組むことで、講義と体験とを合わせた学びの修得を行っている。A大学ではさらに学習効果を高めるため、学生が自ら体験の方法を考え、自由な発想のもとに課題に取り組んでいる。本研究はこの課題の教育効果を確認するために、体験した内容と体験を通して考えた高齢者の気持ちおよび排泄ケアについて明らかにすることを目的とした。

2. 方法

2.1 調査対象

A大学の4年生106名が、3年生のときに老年看護学の講義のなかで提出した課題レポート「高齢者の排泄ケアを考える」(以下、課題レポート)を調査対象とした。

2.2 課題レポートの内容と位置づけ

紙おむつへの排泄体験学習は、3年生の春学期に行われている老年看護学の講義のうちの1つの単元である。「高齢者の排泄・排泄ケア」のなかで実施している。この単元では、排泄のメカニズムや排泄障害が高齢者に及ぼす影響、排尿障害の種類と特徴、排泄パターンの把握を含む排泄アセスメントの方法やケアの方法などについて講義を行っている。講義終了後に紙おむつでの排泄体験をする目的は、講義内容をふまえたうえで体験を通して高齢者の排泄ケ

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 保健看護学科
(連絡先) 白岩千恵子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学
E-mail: c-shiraiwa@mw.kawasaki-m.ac.jp

アに何が求められるのか考えることである。排泄の講義終了後に課題学習の方法について説明した後、テープ式の紙おむつと尿取りパッドを1人1セットずつ持ち帰り、自宅で体験する手順となっている。

課題レポートは、1. 紙おむつでの排泄体験について体験した内容とその状況、2. 体験を通して考えたこと、3. 排泄ケア用品について調べたこと、4. 講義と課題から高齢者の排泄体験について考えたことを記入してもらう内容となっている。

尚、3年生の春学期であるこの時期は、2年生の秋学期に小児看護や母性看護といった領域ごとの概論の履修は済んでおり、領域ごとの各論を履修している時期にあたる。また臨床実習の学習状況は、2年生の春学期に看護師の業務について学ぶ実習と、秋学期に受け持ち患者を受け持ち、看護過程を展開する実習を終了している状況である。

2.3 調査方法

調査は、学生に口頭と文書にて研究の趣旨を説明した後、4年生全員に3年生のときに提出した課題レポートを返却した。そして本研究に同意し参加する場合にのみ、返却された課題レポートを再度提出してもらうよう依頼した。その際署名した同意書とともに封筒に入れて回収ボックスに投函することとした。調査期間は2010+ X年5月のうちの1日であった。

2.4 調査内容

上記に示した課題レポートの内容のうち、今回は学生が自由に発想した体験から何を学べたのか明らかにするため、課題レポートの中の項目1. 紙おむつでの排泄体験について体験した内容とその状況、2. 体験を通して考えたことについて分析した。

2.5 分析方法

課題レポートの記述内容を熟読し、体験した内容は「1. 紙おむつでの排泄体験について体験した内

容とその状況」に記載された内容を、簡潔に表す表現にそれぞれ言い換えた。そして言い換えた同じものを集計した。また、「2. 体験を通して考えたこと」の項目に書かれている部分から、体験を通して考えた高齢者の気持ちと、体験を通して考えたケアについて書かれている部分をそれぞれ取り出し、コードとした。コードを意味内容の類似性に沿って分類し、サブカテゴリー、カテゴリーと抽象度を上げて分析した。尚、これらの分析は、老年看護学を担当する複数の教員で検討した。

2.6 倫理的配慮

本研究は課題レポートが調査対象であり、課題レポートの内容は排泄の体験というプライベートに関するものであるため、看護学生が不利益を被ることなく本人の自由意思で研究に参加できるように、前年度の課題レポートを使用した。1年前の課題レポートを使用することで、評価はすでに終了しており成績等への影響が一切ないことを保証した。また、学習や体験から一定期間あいていることで、看護学生の心理的負担の軽減を図った。調査は研究者らが所属する大学の倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号15-009）。

3. 結果

106名のうち、77名から同意書および課題レポートの提出があった（回収率72.6%）。このうち、実際におむつを着用して排泄を行った記載のある64名の課題レポートを分析対象とした。

3.1 おむつ内への排泄体験の内容とその状況

64名の体験内容とその状況を表1に示す。「ベッド上など仰臥位で排尿（排便）をした」が最も多く16名（25.0%）、次に「おむつを着けて就寝し、翌朝排尿してしばらくそのままいた」、 「仰臥位で試したが出なかつたので、おむつをしたままトイレの便座に座って排尿、排便した」

表1 おむつ内への排泄体験の内容とその状況

	n=64	
ベッド上など仰臥位で排尿（排便）をした	16	(25.0)
おむつを着けて就寝し、翌朝排尿してしばらくそのままいた	8	(12.5)
仰臥位で試したが出なかつたので、おむつをしたままトイレの便座に座って排尿、排便した	8	(12.5)
立位、座位、寝た状態などいろいろ試して排尿した	7	(10.9)
ベッド上で排尿し、そのまましばらくいた	4	(6.2)
仰臥位で排泄しようとしたが出なかつたので、座位や立位で排泄した	4	(6.2)
おむつをつけたままトイレの便座に座って排尿した	4	(6.2)
排尿した後しばらくそのまま過ごした	4	(6.2)
排尿した（体位、体勢の記載なし）	3	(4.7)
おむつは母親にはかせてもらい、仰臥位で排尿した	1	(1.6)
ベッド上仰臥位で出なかつたため座位で排尿した	1	(1.6)
トイレに行くまで我慢し、まにあわなかつたという設定	1	(1.6)
おむつを着けてコンビニまで行き、帰宅後に自室で排泄した	1	(1.6)
おむつを着用した状態でバイトをし、家に帰ってトイレの便座に座って排尿した	1	(1.6)
おむつをはいていつもどおり生活し、排便後1時間そのままいた	1	(1.6)

() はnに対する%

たが出なかったので、おむつをしたままトイレの便座に座って排泄した」が8名(12.5%)であった。また「立位、座位、寝た状態などいろいろ試して排尿した」が7名(10.9%)で様々な体位を体験していた。「仰臥位で排泄しようとしたが出なかったので、座位や立位で排泄した」、「おむつをつけたままトイレの便座に座って排尿した」などが4名(6.2%)、「おむつは母親にはかせてもらい、仰臥位で排尿した」、「おむつを着けてコンビニまで行き、帰宅後に自室で排泄した」、「おむつを着用した状態でバイトをし、家に帰ってトイレの便座に座って排尿した」

などの体験をした学生が各1名(1.6%)であった。

3.2 おむつ内への排泄体験を通して学生がとらえた高齢者の気持ち

おむつ内への排泄体験から看護学生がとらえた高齢者の気持ちについて分析した結果、表2に示す通り、43のコードから15サブカテゴリーと5カテゴリーが抽出された。以下、カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを< >、コードを「 」で示す。

【排泄ケアを受けることはつらい】は、他者に排泄ケアを委ねることのつらさを示しており、5つのサブカテゴリーから成る。ここでは「人に排泄ケア

表2 おむつ内への排泄体験を通して学生がとらえた高齢者の気持ち

カテゴリー	サブカテゴリー	コード (記載数)
排泄ケアを受けることはつらい	他人に排泄ケアを委ねるのは申し訳ない	・人に排泄ケアをしてもらうととても恥ずかしいし申し訳ない (5) ・排泄ケアが他人の手で行われることは耐え難い (1)
	他人に排泄ケアを委ねることは我慢を強いられる	・他人におむつ交換を委ねることのふがいなさから排泄の度に嫌な気持ちになるし我慢を強いられる (3) ・排泄後の処理を自分でできない人はすぐにおむつを外すことができないし、看護師にも頼みづらい (1) ・すぐにおむつ交換してもらえず悲しい (1) ・自分で排泄の処理ができないということは羞恥心と不快感を感じて屈辱的である (1)
	排泄ケアを受けることは想像以上に恥ずかしい	・他人におむつ交換の世話をされることは計り知れないほどの羞恥心がある (1) ・排泄するたびに介護者に見られたくない (1) ・おむつを着けているだけで恥ずかしいのに病棟ではさらに看護師など誰かに見られてしまい恥ずかしい (1) ・羞恥心や罪悪感を体験しただけの私よりはるかに強く感じている (1) ・ケアを委ねる相手には羞恥心や一番気にかけてほしいところをわかってほしい (1)
	排泄ケアを人に委ねる気持ちをわかってもらえずつらい	・寝たきりの患者はこんなに不快な思いをしているのに、『気持ち悪い』と表出できなくてつらい (1) ・おむつに排泄したことについて触れられたり変に褒められると大人として憤りを感じる (1) ・自分がトイレに行きたいときに『ちょっと待って』と言われると苦しい (1)
	排泄ケアを人に委ねることは自尊心が傷つく	・自分の排泄物が他人の支配下にあるということは非常に気が重く自尊心が傷つく (2)
おむつを交換するまで不快	おむつ交換が排泄後すぐにできなくて不快	・排泄後すぐにおむつ交換ができないと不快感がとても強い (4) ・ケアでおむつを確認したときに交換していたため確認がなければそのまま不潔な状態が続くと思うとつらい (1) ・おむつ交換してもらえらるまで待つのは臭いも気になる (1)
	長時間排泄物に触れたままで気持ち悪い	・夜間の排尿後も長時間着用することはとても気持ち悪い (1) ・気持ち悪い感覚を長時間感じなければならぬのは非常につらい (1) ・排泄物が長時間付着することにより私の何倍も不快感を感じている (1) ・排泄物が付着したままの外出はつらい (1) ・排泄物が長時間接触しているのが嫌だ (1) ・おむつへの排泄は排泄した後も感覚があり不快感が残る (1)
	排泄後はおむつの中が蒸れて不快	・排尿後はおむつの中がむれてとても不快だ (1)
おむつでは安心して排泄できない	できる限りトイレで排泄したい	・トイレではない場所で排泄することへの抵抗感が排泄を我慢したりトイレでの排泄を望むことにつながる (1) ・できる限りおむつを使わず自分でトイレで排泄するほうがずっと良い (1) ・すっきり出すためにはポータブルトイレなどを使ったほうが良い (1) ・トイレで排泄できることの喜びを感じた (1) ・身体が動かなくなっても排泄だけは自力でしたい (1)
	臥位では排泄しにくくて不快	・ベッド上で排泄することは想像以上に不快だ (2) ・寝たきりの排泄はもっと気持ち悪いし排尿しにくい (1)
	漏れるかもしれないという不安がある	・漏れているかもしれない不安感と湿っている不快感がある (2) ・仰臥位での排泄は尿が後ろへ行く感覚や漏れていないか心配になる (1)
	病室はプライバシーが守られず排泄する環境と言えない	・隣の患者や人の声が聞こえる場所は排泄しやすい環境といえない (1) ・大部屋でのおむつの排泄はプライバシーが守られず、羞恥心を感じ自尊心が傷つく (1)
おむつを使用すること自体に葛藤がある	おむつへ排泄することに抵抗を感じ葛藤がある	・おむつへ排尿することにはじめは葛藤がある (2) ・おむつを着用することへの抵抗感が増強した (1) ・おむつという環境に慣れるまでには時間がかかる (1)
	おむつに頼らなければならない自分が情けない	・人間として当たり前でできることが自分でできないふがいなさを感じる (1) ・おむつをしている自分の姿を見て情けないと落胆する (1)
おむつを着用すると落ち着けない	おむつを着けていることで違和感や不快感がある	・陰部に違和感があると気分がすぐれなかつたりすぐ気になる (1) ・おむつを装着している不快感が不眠につながるかもしれない (1)

をしてもらうととても恥ずかしいし申し訳ない」や「排泄ケアが他人の手で行われることは耐え難い」など、〈他人に排泄ケアを委ねるのは申し訳ない〉という高齢者の気持ちを想像していた。また、「他人におむつ交換を委ねることのふがいなさから排泄の度に嫌な気持ちになるし我慢を強いられる」ことや、「排泄後の処理を自分でできない人はすぐにおむつを外すことができないし、看護師にも頼みづらい」ため〈他人に排泄ケアを委ねることは我慢を強いられる〉ととらえていた。さらに「他人におむつ交換の世話をされることは計り知れないほどの羞恥心がある」ため〈排泄ケアを受けることは想像以上に恥ずかしい〉ことや、〈排泄ケアを人に委ねることは自尊心が傷つく〉ととらえていた。また「ケアを委ねる相手には羞恥心や一番気にかけてほしいところをわかってほしい」と思う一方で、「おむつに排泄したことについて触れられたり変に褒められると大人として憤りを感じる」ことから、〈排泄ケアを人に委ねる気持ちをわかってもらえずつらい〉ととらえていた。

【おむつを交換するまで不快】は、おむつへの排泄は交換するまで臀部が排泄物にずっと触れている感覚が残る不快であることを示しており、3つのサブカテゴリーから成る。「ケアでおむつを確認したときに交換していたため確認がなければそのまま不潔な状態が続くと思うとつらい」などの〈おむつ交換が排泄後すぐにできなくて不快〉であることや、〈長時間排泄物に触れたままで気持ち悪い〉こと、〈排泄後はおむつの中が蒸れて不快〉であることに気づいていた。

【おむつでは安心して排泄できない】は、おむつへの排泄は体位、漏れの不安、環境から安心できないことを示しており、4つのサブカテゴリーから成る。「身体が動かなくなっても排泄だけは自力でしたい」などの〈できる限りトイレで排泄したい〉という高齢者の希望や、「ベッド上で排泄することは想像以上に不快だ」などの〈臥位では排泄しにくくて不快〉という体位による排泄のしづらさに気づいていた。また「仰臥位での排泄は尿が後ろへ行く感覚や漏れていないか心配になる」などの〈漏れるかもしれないという不安がある〉ことや、〈病室はプライバシーが守られず排泄する環境と言えない〉ととらえていた。

【おむつを使用すること自体に葛藤がある】は、おむつで排泄することやおむつを着けていることに対する葛藤や情けなさを示しており、2つのサブカテゴリーから成る。ここでは「おむつへ排尿することにはじめは葛藤がある」ことや、「おむつという

環境に慣れるまでには時間がかかる」ことなどから、〈おむつへ排泄することに抵抗を感じ葛藤がある〉ととらえていた。また「人間として当たり前に行えることが自分でできないふがいなさを感じる」ことから、〈おむつに頼らなければならない自分が情けない〉という気持ちに気づいていた。

【おむつを着用すると落ち着けない】は、1つのサブカテゴリーから成り、「陰部に違和感があると気分がすぐれなかつたりすごく気になる」などの〈おむつを着けていることで違和感や不快感がある〉という、おむつを着けている影響について考えていた。

3.3 おむつ内への排泄体験を通して考えた高齢者の排泄ケア

看護学生がおむつでの排泄体験を通して考えたケアについて分析した結果、表3に示す通り、29のコードから13サブカテゴリーと4カテゴリーが抽出された。

【排泄後の不快感をできる限り取り除く】は、おむつへ排泄した際に排泄物が臀部に触れている不快感を少しでも早く取り除くケアを示しており、2つのサブカテゴリーから成る。「排泄物をできるだけ早く取り除いて不快感の軽減をはかる」などの〈排泄物に触れている時間を短くする〉ことや、「濡れたり汚れているおむつはとても不快であるため移動時に必ずおむつを確認する」などの〈排泄後の不快感が少しでも軽減するようにケアを行う〉ことを考えていた。

【排泄を他者に委ねる気持ちを受け止める】は、自分で排泄のケアができない高齢者の気持ちを介助者は受け止める必要があることを示しており、3つのサブカテゴリーから成る。「『ごめんね』ではなく『ありがとう』と言われるような自責の念を抱かない排泄ケアを責任をもって行う」ことや、「排泄行為を他者にしてもらわなければならないという患者の気持ちを考慮する」ことなど〈他者に排泄を委ねる高齢者の気持ちを考慮してケアを行う〉こと、〈おむつに頼りたくないという気持ちを大切にしたいケアを行う〉ことや、〈ナースコールだけで対応しない〉ことを高齢者の排泄ケアとして考えていた。

【プライバシーを守り羞恥心に配慮する】は、排泄ケアが羞恥心を伴うケアであるために配慮が必要であることを示しており、2つのサブカテゴリーから成る。「人間が一番羞恥心を感じることを排泄行為であることを念頭に置いてケアをする」などの〈羞恥心や自尊心に配慮したケアを行う〉ことや、「おむつを装着したらそれで終わりではなくプライバシーに配慮したケアを提供する」など〈プライバ

表3 おむつ内への排泄体験を通して考えた高齢者の排泄ケア

カテゴリー	サブカテゴリー	コード (記載数)
排泄後の不快感をできる限り取り除く	排泄物に触れている時間を短くする	<ul style="list-style-type: none"> 排泄物をできるだけ早く取り除いて不快感の軽減をはかる (7) 苦痛を感じる時間を短くするため細かくおむつを確認しいち早く気付く (2) 不快感が大きいため排泄後のおむつを長時間着けておくことがないよう適切な時間におむつを交換する (2) 排泄後の不快感が続くことのないよう頻回に排泄ケアを行い清潔を保つ (1)
	排泄後の不快感が少しでも軽減するようにケアを行う	<ul style="list-style-type: none"> おむつへ排泄した後気持ち悪くてもすぐにお風呂に入ることができないので清拭を行う (3) 日々続く不快感を少しでも軽減できるようにケアを提供する (1) 思っていた以上に臭いが気になるため素早く処理を行う (1) 濡れたり汚れているおむつはとて不快感であるため移動時に必ずおむつを確認する (1)
排泄を他者に委ねる気持ちを受け止める	他者に排泄を委ねる高齢者の気持ちを考慮してケアを行う	<ul style="list-style-type: none"> 排泄行為を他者にしてもらわなければならないという患者の気持ちを考慮する (3) 今回体験したおむつの中で排泄するというものすごい不快感を忘れずに関わる (2) 『ごめんね』ではなく『ありがとう』と言われるような自責の念を抱かない排泄ケアを責任をもって行う (1) 家族でも恥ずかしいと思う排泄の介助は患者と看護師の信頼関係が重要である (1)
	おむつに頼りたくないという気持ちを大切にケアを行う	<ul style="list-style-type: none"> おむつに頼りたくない、排泄したくないという気持ちを大切にケアをする (2) おむつで排泄することにならないよう患者と協力して予防運動を行う (1)
	ナースコールだけで対応しない	<ul style="list-style-type: none"> ナースコールで対応しない (1) ナースコールで申し出があったときには素早く患者のもとに行き介助する (1)
プライバシーを守り羞恥心に配慮する	羞恥心や自尊心に配慮したケアを行う	<ul style="list-style-type: none"> プライバシーの保護だけでなく素早く行うなど羞恥心に配慮する (3) 人間が一番羞恥心を感じることを排泄行為であることを念頭に置いてケアをする (2) 患者の自尊心が少しでも傷つかないよう十分注意する (1)
	プライバシーをしっかりと守る	<ul style="list-style-type: none"> プライバシーの保護に努める (2) おむつを装着したらそれで終わりではなくプライバシーに配慮したケアを提供する (2) プライバシーや人権を守りながら排泄ケアをする (1)
高齢者に合った排泄方法を考える	できるだけトイレで排泄ができるように援助する	<ul style="list-style-type: none"> 私たちと同じようにトイレで排泄できるよう援助する (3) 自分でトイレに座って排泄することの大切さをふまえて患者の訴えに沿った援助をする (1)
	いざという時のお守りとしておむつを上手に利用する	<ul style="list-style-type: none"> おむつは間に合わなかったときのお守りという気持ちで関わる (1)
	介助者優先のケアをしない	<ul style="list-style-type: none"> 介助のしやすさを優先するために紙おむつを選ぶことがないようにする (1)
	本人の意思を尊重しながらおむつの使い方を考える	<ul style="list-style-type: none"> おむつのつけはじめは抵抗があるため、本人の意思を尊重しながら紙おむつの使い方を考える (1)
	漏れないようにおむつをしっかりとフィットさせる	<ul style="list-style-type: none"> もれさせないようにおむつをしっかりとフィットさせる (1)
高齢者の排泄についてアセスメントする	<ul style="list-style-type: none"> 病気と関わっている患者にこれ以上排泄するという不快感を与えないために排泄の状況を聞く (1) 	

シーをしっかりと守る>ことが高齢者の排泄ケアとして必要であると考えていた。

【高齢者に合った排泄方法を考える】は、おむつの使用方法を含めた適切な排泄方法を考える必要があることを示しており、6つのサブカテゴリーから成る。学生は「私たちと同じようにトイレで排泄できるよう援助する」など<できるだけトイレで排泄ができるように援助する>ことだけでなく、「おむつは間に合わなかったときのお守りという気持ちで関わる」という<いざという時のお守りとしておむつを上手に利用する>ことや、<介助者優先のケアをしない>こと、<本人の意思を尊重しながらおむつの使い方を考える>ことが高齢者の排泄ケアに必要なことであると考えていた。また<漏れないようにおむつをしっかりとフィットさせる>という技術面

だけでなく、<高齢者の排泄についてアセスメントする>というアセスメントの重要性についても認識していた。

4. 考察

看護学生はおむつへの排泄体験をする際、自分なりに工夫して体験していることが明らかとなった。高齢者の置かれている状況を想像し、できるだけ高齢者の状態に近づけられるよう、ベッド上で仰臥位となって排尿や排便をするなどの工夫が見られた。またおむつの装着を母親に依頼したり、コンビニやバイト先におむつを着けたまま出向いて行ったりと、学生ならではの自由な発想で体験することができていた。岩鶴ら⁴⁾が行った方法では、紙おむつを着けて実際に排尿するのみであり、体位の工夫や装

着時間までは明らかになっていなかった。今回体験の内容をあえて指定せずにいたことで、体験の幅が広がることが分かった。また一方で仰臥位での排泄を試みたものの、なかなか排泄ができずにトイレでおむつをはいたまま便座に座って排泄したという学生も多かった。このことから排泄時の周囲の環境や体位、姿勢がどれだけ排泄行動に影響しているのかということも学んでいた。以上のことから課題の提示はするものの、その方法については学生自ら考え実施するという学生主体の手法を取り入れることで、より高い教育効果を得られることが明らかとなった。

また看護学生はおむつへの排泄体験から、高齢者の立場に立って気持ちを考えることができていた。このうち【排泄ケアを受けることはつらい】、【おむつを交換するまで不快】、【おむつでは安心して排泄できない】、【おむつを使用すること自体に葛藤がある】の4つのカテゴリーは、先行研究の結果とほぼ同様の内容であった³⁶⁾。恥ずかしい、申し訳ない、つらいなどのマイナスの感情や憤りを感じていることから、改めておむつに排泄することがどれだけ高齢者にとって屈辱的で羞恥心を抱くことであるのか身をもって体験できたと考える。【おむつを着用すると落ち着けない】は、おむつを着けていることにより気分がすぐれなかったり、不眠になるという他への影響について考えていた。このことから普段おむつを着けていない高齢者が、入院などにより一時的におむつを着けなければならぬ状況に直面した際、入院による環境の変化だけでなく“普段とは違う”ことが睡眠状況などにも影響していないか考える必要があることを示唆していた。一方で、「おむつをしているから安心して活動できる」のようなプラスの気持ちについての記載は見当たらなかった。高齢者とは異なり、年齢が若く不自由なくトイレに行くことのできる看護学生にとって、おむつへの排泄は不快でしかなく、装着することによる安心感や動くことが苦痛な時にはおむつへの排泄も一つの解決策であるという考えに及びにくいことは想像に難くない。しかし近年健康的な生活を意識する高齢者が増え、テレビコマーシャルでは排泄に関する悩みを抱えていても、履くタイプのおむつを着用して高齢者が元気に外出する場面もみられるようになり、今後は排泄やおむつに対する学生のイメージが変わる可能性もある。

おむつ内への排泄体験を通して考えた高齢者の排泄ケアにおいては、【排泄後の不快感をできる限り取り除く】、【排泄を他者に委ねる気持ちを受け止める】、【プライバシーを守り羞恥心に配慮する】の3

つのカテゴリーは、高齢者の排泄ケアとして一般的に言われていることである。しかし【高齢者に合った排泄方法を考える】のカテゴリーは、筆者らが特に排泄の講義で学生に伝えていた内容であった。これは学生の関心が“自分が高齢者になったらおむつは使いたくない”や“高齢者がおむつを使うことは仕方がない”という思考にとどまっていないことを表していると考えられる。中でもくいぎという時のお守りとしておむつを上手に利用する>のサブカテゴリーは、おむつをプラスのイメージでケアに取り入れることを示しており、おむつの効果的な使用についても考える必要があることを理解できていたのではないかと考える。

以上のことから独創的な工夫で排泄体験をしたことや、おむつへ排泄することが他にも影響を与えること、プラスの視点でおむつの使用を考えることなどの少数の意見も重要であるため、今後は学びを共有できる場が必要と考える。アクティブラーニングの手法を取り入れ、体験した内容を学生同士で共有し、高齢者に対するケアの方法についてディスカッションの時間を設けることで、学生自ら問題に気づき解決する力を養っていくことも期待できる。

5. 結論

排泄体験の課題レポートを分析した結果、学生は自由な発想の中で様々な体験を工夫していることが明らかとなった。

おむつ内への排泄体験を通して学生がとらえた高齢者の気持ちは、【排泄ケアを受けることはつらい】、【おむつを交換するまで不快】、【おむつでは安心して排泄できない】、【おむつを使用すること自体に葛藤がある】、【おむつを着用すると落ち着けない】の5つのカテゴリーが生成された。

またおむつ内への排泄体験を通して考えた高齢者の排泄ケアは、【排泄後の不快感をできる限り取り除く】、【排泄を他者に委ねる気持ちを受け止める】、【プライバシーを守り羞恥心に配慮する】、【高齢者に合った排泄方法を考える】の4つのカテゴリーが生成された。

以上のことから、学生自ら考え実施するという学生主体の手法を取り入れることが、高齢者の置かれている状況を具体的に考えることに繋がっており、より高い教育効果を得られることが明らかとなった。今後は高齢者に対するケアの方法を学生同士で共有することが課題である。

6. 本研究の限界

今回の課題レポートの分析では、紙おむつへの排

泄体験を通して学生が考えた、高齢者の気持ちやケアについて記述されている部分を抜き出した。しかし課題レポートの記述内容にはこれまでの老年看護学やそれ以外の講義、臨床実習での体験、学生自身

の背景などが影響していることは否定できない。したがって記述された内容のすべてが体験による学びであるとは言い難く、本研究の限界であると考える。

文 献

- 1) 原等子：排泄。北川公子著者代表，老年看護学，第8版，医学書院，東京，178-189，2014。
- 2) 高植幸子，林智世，金原弘幸，吉田和枝：三重県における高齢者の排泄ケアの実態調査。三重看護学誌，9，111-116，2007。
- 3) 上平公子，松村三千子：老年臨床看護におけるおむつ着用体験による学びの変化。岐阜医療科学大学紀要，3，143-151，2009。
- 4) 岩鶴早苗，天津榮子，水田真由美：老人看護学における学内演習の効果の検討—「Aging」「排泄体験」を通して—。和歌山県立医科大学看護短期大学部紀要，3，39-47，2000。
- 5) 木村ゆかり，吹田夕起子，長内志津子，福岡裕美子：看護学生のおむつ排泄体験による意識の変化とおむつ排泄イメージの変化。青森県立保健大学雑誌，17，29-35，2017。
- 6) 内田洋子，小泉美佐子，新井明子：おむつ体験による学生の不快感の特徴と排泄ケアの学び。群馬保健学紀要，27，65-70，2006。

(平成30年2月20日受理)

What Nursing Students Learned from Excretion Experiences Using Diapers

Chieko SHIRAIWA, Tomoko KOYABU and Keiko TAKEDA

(Accepted Feb. 20, 2018)

Key words : gerontological nursing, nursing students, diaper, excretion experience

Correspondence to : Chieko SHIRAIWA

Department of Nursing

Faculty of Health and Welfare

Kawasaki University of Medical Welfare

Kurashiki, 701-0193, Japan

E-mail : c-shiraiwa@mw.kawasaki-m.ac.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.27, No.2, 2018 513 – 520)